33 アジア美術コレクター・実業家：エミール・ギメ

Emile GUIMET
エミール・ギメ

パリにあるギメ東洋美術館を創設したエミール・ギメ（1836-1918）は、リヨンの実業家の息子として生まれました。父親のジャン＝バティスト・ギメは、合成ウルトラマリンと呼ばれる青色の顔料を発明して成功した人物です。エミール・ギメは、若い頃から異なる文明や宗教に関心を持っていました。父親から引き継いだ工場を経営しながら、1867 年のパリ万国博覧会や 1873 年にパリで開催された第一回国際東洋学者会議へ出席したことで、日本の情報に直接触れる機会を得ました。そして、1876 年にフランス政府の「極東宗教学術調査使節」として、日本、中国、インドをめぐる世界一周の旅に出ました。ギメは、画家のフェリックス・レガメを伴って、1876 年に２か月間、日本に滞在しました。1878 年のパリ万国博覧会では、ギメが持ち帰った東洋の品々が展示され、調査の成果が紹介されました。

ギメは、日本滞在中に見聞して体験したことや訪れた土地にまつわる歴史や民間伝承を、レガメの挿絵入りで「日本散策」二巻にまとめました。この本では、19 世紀末の明治の日本人の行動や宗教観について、エジプトやインドといった他国との比較も交えながら、ギメ独自の興味深い分析がなされています。

著書の中で、ギメは次のように語っています。
「日本は、自国の風俗に対し、あまり自信を持っていない。日本人の力となり幸せの源となってきた多くの風俗、制度や考え方をあまりにも性急に一掃しようとしている。だが、もしかしたら日本が自分たちを見直すときが、いつの日か訪れるのではないだろうか。私は日本のためにそれを願っている。」

19 世紀当時の日本は、日本よりも外国の文化が優れていると考えて日本の伝統文化を捨て去ろうとし、多くの美術品や仏像が海外に流出しました。ギメが日本で蒐集した美術品は、幸いにもギメ東洋美術館のコレクションとして現代に引き継がれています。

掲載日：2023 年 12 月 1 日